生活コミュニティー

命の尊さ学ぶ機会に

小児病棟ボランティア

病気や障害のため入院する子どもの遊び相手をする「遊びのボランティア」。特定非営利活動法人（NPO法人）「病気の子ども支援ネット　遊びのボランティア」（東京・江東）では、学生が子育ての大変さを知ったり、主婦が育児への社会支援の重要性に気づいたりと、参加を通じて学ぶことは多いという。理事長で保育士の坂上和子さん（52）に報告してもらった。

坂上　和子

「私が大学生活で成長できたと思えるのは、ボランティアを通じて命を見つめたから。生きることに向かい合えた」。大学二年からボランティアになり、週一回、熱心に参加した女子大生（22）の言葉だ。

ボランティアの七割が学生。そのほか、子育て経験のある主婦もいる。主婦で社会人学生の女性（46）は「長期入院の子どもと親の現状を知り、病児保育の重要性を強く感じた。同じ母親として支え合いたい」と参加している。

○　○

私が新宿区の訪問保育士として国立国際医療センター（東京・新宿）の小児病棟を訪れたのは二十年ほど前。難病の二歳の女児を担当した。未熟児の保育器を出ても一言も話さないのが母親の心配の種だった。

しかし「オンモに行こう」と声をかけると、うれしそうに靴をはき、点滴台を引っ張ってプレールーム（遊び部屋）に急いだ。そこでボール遊びやままごとを覚えたが、当時はおもちゃもそろっておらず、子どもたちは何となくテレビを見ているだけ。「予算がない」と病院側はいうが、保育士の視点でいえば「異常」な環境だった。

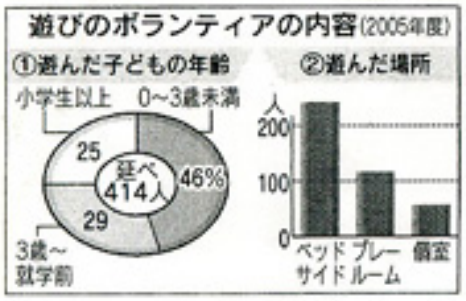
ある日、青いシーツを敷いて布で作った貝や魚を置き、魚釣りをした。子どもたちは「わあー、かわいい。大きいのが釣れたよ」と大騒ぎ。白血病などで入院個室で過ごす子どもたちもマスクをつけて遊びに来た。プレールームは子どもにとって小さいながらも社会であり、友達と遊ぶことで社会性が広がる。

「（新宿区民ではない）うちの子とも遊んで」という親の声があがり、一九九一年、職場の仲間六人とボランティア活動を始め、現在、仲間は四十六人に増えた。大学生や主婦、教員、保育士ら顔ぶれは多様だ。

「病院にお世話になった恩返しに」「福祉に関心がある」と動機も様々。語学ボランティアも求められている。無口と思っていた中国人少年が語学のできるボランティアに会い、機関銃のようにしゃべりだして皆を驚かせたこともある。

「個室の女の子と遊んでも奏でて遊んだ。骨髄移植の後、生死をさまよう日々にあってもボランティアとの遊びを楽しみ、訪問は亡くなるまでの五カ月間で七十三回に及んだ。

病児の年齢や状況に応じて遊びを用意する（東京都新宿区）



大学生や主婦参加　親の期待も高まる

活動を始めた当初は、病院にボランティアを受け入れる窓口もなかった。大きく変わったのは、子どもとボランティアとの距離だ。個室へ立ち入れるようになり、骨髄移植を当日に控えたり、終末期にある子どもの病床まで行くことが許されるようになった。ボランティアにとって、子どもたちの懸命に生きる姿から命の尊さや支え合うことの大切さ、優しさを学ぶ貴重な機会になっている。

○　○

二〇〇五年度は、延べ四百十四人の子どもに三百九十二人のボランティアがかかわった。子どもの七五%が乳幼児。点滴や管がついて移動ができない子や個室の子への対応のため、一人ひとり手がかかる。「活動日を増やして」と、病院や親からの要望は年々高まっている。

私たちが目指すところはたとえ子どもが病気になって長期入院しても、子どもらしい成長や発達、家族の安心を約束する環境が保証されることだ。同時に、ボランティア活動を通じ、それを支える市民社会を育てたいと願っている。